

# 河川での自然体験活動中の事故を未然に防ぐためには

## —新たな課題に対応する安全管理の提案—

東北公益文科大学 遠藤翔

□推 薦

指導教員 呉尚浩

本論文を執筆した遠藤翔さんは、呉尚浩ゼミにおいては、山形県庄内地域の海岸林保全やカブトエビ保全水田プロジェクトで活躍するとともに、飛島においては防災に関するプロジェクトに関わる何事に関してもとても意欲的に取り組んできた。広く、自然体験活動に興味をもつ中で、自然体験活動に関する安全講習会に参加したことをきっかけに、遠藤さんは、河川での自然体験活動中の事故を未然に防ぐための安全管理をテーマに、卒論に取り組むことになった。

近年、親水空間づくりや多自然型川づくりが進展し、川と人とのつきあい方をもう一度見直す動きが盛んになっていることは喜ばしいことであるが、その反面、異常気象による従来にはないタイプの集中豪雨などの発生も増加している。

そのような背景の中で、2008年に起きた兵庫県神戸市灘区の都賀川の親水空間における水難事故は、雨が降り始めてから10分ほどで遊歩道に濁流が溢れ始めるという非常に短時間における突発的で局地的な集中豪雨がもたらした災害であり、その後の河川の安全管理を考える上で、大きな課題を投げかける事故であったといえる。

そのような観点から、遠藤さんは、その後の国や自治体の対策や自然体験活動団体の対応について調べ、気象庁が導入した「高解像度降水ナウキャスト」の改善点の指摘や、親水空間がある河川への増水警報システムの導入など国や自治体のすべきことと、あたり前ではあるが河川活動団体が、従来以上に安全管理に取り組み、全スタッフが講習を受ける必要などを提言している。

遠藤さんが本論文で培ったものごとを調べ、深く掘り下げていく経験を、今後の人生の中でぜひとも活かして欲しいと願っている。